

## 科学研究費助成事業 研究成果報告書

令和 4 年 6 月 7 日現在

機関番号：34314

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2019～2021

課題番号：19K00357

研究課題名(和文) 雑誌「詩学」「現代詩」「ユリイカ」を中心とする昭和30年代詩の研究

研究課題名(英文) Research on poetry of the 1950s centering on the magazines "Shigaku", "Gendai-shi", and "Eureka"

研究代表者

加藤 邦彦 (Kato, Kunihiko)

佛敎大学・文学部・教授

研究者番号：30350383

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 3,200,000円

研究成果の概要(和文)：昭和30年代を代表する詩雑誌、「詩学」「現代詩」「ユリイカ」の研究を行った。各誌は新人育成に力を入れた。その全国への広がりが地方の新人たちの連帯をうながし、その過程で「詩壇」という概念が形成されていったこと、その「詩壇」イメージが詩人社会を閉鎖的なコミュニティにしていたことを本研究で明らかにした。ほかにも、雑誌メディアに誘導された「文学者の戦争責任」論争によって戦後詩人の目指す方向性が自覚されていく様子や、昭和30年代に詩劇への注目があつたこと、当時の詩雑誌は発行部数が伸びないことに悩んでいたことなど、これまでの日本近現代詩研究でほとんど注目されてこなかったことを浮かび上がらせた。

研究成果の学術的意義や社会的意義

従来の研究では、詩人それぞれについて個別に検討されることが大半であった。また、戦後詩の第一世代の研究は多少みられるが、現在も活躍している詩人が含まれる戦後詩の第二世代については本格的な研究をほとんどみることができない。戦後詩の第二世代と彼らを支えた詩雑誌にスポットを当てることで、これまで知られていなかった近現代詩の展開や詩人たちの諸相を明らかにした。

また、雑誌と関わりの深い日本近現代文学の書き手たちの課題や問題意識がメディアによっていかに誘導され、かたちづくられていったかに注目することで、日本近現代文学研究の領域のみならず、外国文学の研究やメディア研究にも応用できる視点を提示した。

研究成果の概要(英文)： We conducted research on the leading poetry magazines of the 1950s: "Shigaku", "Gendai-shi", and "Eureka". Each of these magazines focused on fostering newcomers. This study clarified that the spread of these magazines throughout Japan encouraged solidarity among local newcomers, and that the concept of a "poetry world" was formed in the process, and that the image of a "poetry world" made poets' society a closed community. The study also revealed how the postwar poets became aware of the direction they were taking as a result of the "literary people's responsibility for the war" controversy led by the magazine media, how there was a focus on poetry drama in the 1950s, and how poetry magazines at the time were troubled by the lack of growth in their circulation. The study also brought to light some facts that have received little attention in previous studies of poetry history.

研究分野：日本近現代文学、日本近現代詩

キーワード：日本近代詩 日本現代詩 戦後詩 昭和30年代 詩学 ユリイカ 現代詩

## 1. 研究開始当初の背景

1945年の敗戦によって日本現代詩は新たな展開をみせた。そこには、小説中心の文学界における不遇を嘆いていた戦前の詩人たちのほとんどが戦時下、時局に迎合して戦争協力詩をこぞって執筆し、文学における詩の地位向上を目論んだという背景があり、詩が戦争に対して無力だったことを目の当たりにした若者たちの絶望感や焦燥感がある。そのようななかから出てきた戦後詩人に、鮎川信夫や田村隆一などの「荒地派」と呼ばれる若い文学者たちがいる。彼らは、戦前に一大潮流を形成したモダニズム詩の流れを汲みながら、戦前や戦中とは異なる形而上的な詩を発表し、日本の詩にそれまでとは違う流れをもたらした。一般的に、彼らは「戦後詩の第一世代」と呼ばれ、現在少しずつ研究が進んでいる。

その第一世代のあとから出てくる詩人たちが、谷川俊太郎、大岡信、茨木のり子、中村稔ら、「戦後詩の第二世代」である。戦争の最中に幼少期を過ごし、戦地に赴くことのなかった彼らが書く詩は、戦中体験あるいは戦後認識の色の濃い、重厚かつ暗い詩を書いた第一世代とは異なり、明朗さが目立つ。日本現代詩を考える上で重要な詩人を多数含む戦後詩の第二世代は、批評の方面では非常に多く取り上げられているものの、研究としてはまだほとんど手つかずの状態だ。

その第二世代の活動を支えたのが、昭和30年代を代表する詩雑誌、「詩学」(1947年8月～2007年9月)、「現代詩」(1954年7月～1964年10月)、「ユリイカ」(1956年10月～1961年2月)である。これらの雑誌は、第二世代の新しい詩人たちに多くの誌面を提供し、彼らの活躍の土壌となった。また、これらの雑誌が特集を組むことで詩壇に提供された話題や、そこから起こった論争も多い。「詩学」「現代詩」「ユリイカ」は、若い詩人らに活動の場を与えるとともに、さまざまな特集を組むことで、昭和30年代の詩の進むべき方向性を切り拓いていった。

以上のような認識のもと、昭和30年代の現代詩の展開を、雑誌メディアとの関係のなかで検討することを目指したのが本研究である。

## 2. 研究の目的

(1) 本研究では、昭和30年代を代表する「詩学」「現代詩」「ユリイカ」の書き手や特集などに注目することで、まだほとんど研究が進んでいない戦後詩の第二世代の特質およびその形成過程について検討し、昭和30年代の詩の展開が個々の詩人たちの問題意識によって展開していくのではなく、実は雑誌メディアによって誘導され、かたちづくられたものであることを明らかにすることを目的とした。より具体的には以下の通り。

従来の研究では、戦前、戦中、戦後の詩の展開は、時代との関わりに応じたそれぞれの詩人たちの内発的な要因に基づいているという前提のもと、詩人それぞれについて個別に検討されることが大半であった。また、研究されている詩人たちについても戦後詩の第一世代の研究は多少みられるが、現在も活躍している詩人が含まれる戦後詩の第二世代については本格的な研究をほとんどみることができない。日本の現代詩における一大画期をなした戦後詩の第二世代と彼らを支えた詩雑誌にスポットを当てることで、これまで知られていなかった近現代詩の展開や詩人たちの諸相を明らかにすることを目的とした。

雑誌と関わりの深い日本近現代文学の書き手たちの課題や問題意識がメディアによっていかに誘導され、かたちづくられていったか。あるいは、多くの読者に読まれる文学は作品の内容というよりもメディアの力によるところが大きく、それに応じて文学者たちがみずからの立ち振る舞いや作品内容をどう変容させていったか。そのことに注目することで、日本近現代文学研究の領域のみならず、外国文学の研究やメディア研究にも応用できる視点を提示することを目的とした。

## 3. 研究の方法

(1) 「詩学」「現代詩」「ユリイカ」の3誌を研究代表者・研究分担者それぞれで役割分担し、各誌の執筆者一覧・特集一覧を年代ごとに作成するとともに、詩作品、時評、詩論、編集後記を精査した。

(2) 調査結果やそれに基づいて考察した内容を計4回の公開研究会のなかでそれぞれ報告し、研究会参加者を交えて昭和30年代の詩の傾向や詩の動向について検討・討議した。

(3) それぞれの研究結果を論文として発表した。すでに論文化して公表したものもあるが、一部についてはこれから論文化する予定。

## 4. 研究成果

(1) 戦後詩の第二世代の特質およびその形成過程について。本研究によって明らかとなった戦後詩の第二世代の特質は各詩人によって異なるため、簡単に記すのは難しい。たとえば、戦争体験の描出の仕方、あるいは描出の有無においてもさまざまである。一方、形成過程のなかで大きいのは特に「詩学」が果たした役割である。「詩学」は「詩学研究会」を組織し、そこから多くの新人が出現したことはすでに知られていたが、その全国への広がりが地方の新人たちの連帯をうながし、「詩壇」という概念が形成されていく様子が本研究から浮かび上がってきた。同様の動きは、各地に研究会を組織し、雑誌後期は200名以上の会員を有する「現代詩の会」を編集母体とした「現代詩」にもみられる。その詩人たちに誌面を提供し、戦後詩の第二世代あるいはさらに次の世代への世代交代を導いたのが、本研究が対象とした各誌である。ただし、活動の幅を詩以外の世界に広げていく谷川俊太郎への「詩学」における批判にみられるように、そうしてイメージされた「詩壇」概念が詩人たちの社会を閉鎖的なコミュニティーに仕立て上げていき、小説や評論を中心とする「文壇」との距離が開いていくという弊害も本研究からみえてきた。

(2) 昭和30年代の詩の展開を雑誌メディアが誘導したこと。各誌で示されたさまざまな特集や話題は、雑誌の販売戦略のひとつである。当時の詩の世界において必ずしも中心的ではない話題を各誌が提供することで、いまこのことが話題であるという印象が詩に関心を持つ人物たちにイメージされていく。詩人たちから自発的に話題となったとは限らないだけに、それらの特集は個々の創作活動にどれほどの影響を与えたのかははっきりしない面がある。特に社会性を重視し、詩と直接的には関係のない記事を多く掲載した「現代詩」に、そのような特集や話題は多い。しかしもちろん、少なからず成果を挙げたものもあった。外国詩の紹介や戦前の詩からの歴史性が意識された記事などがそれに当たるが、なかでも昭和30年代の詩の動向にもっとも大きな影響を与えたのは吉本隆明に端を発する「文学者の戦争責任」論争である。この論争によって、戦時下に戦争協力詩を書いていた何人かの詩人が戦後詩の中心から外れていくとともに、戦後詩人の目指す方向性が自覚されていく。と同時に、詩人たちの世代交代が進んだ。それらのことを、本研究では各誌の調査を通じて詳細に検討した。

(3) 「詩劇」への注目。昭和30年代に各誌で話題となったひとつに詩劇がある。NHKのラジオ番組「放送詩集」における詩の朗読の放送によって詩人の詩劇執筆の機会が多くなっていき、多くの詩人が作品を提供した。その背景には、原稿料が支払われない詩雑誌に対してラジオ番組ではギャラが支払われるということがあり、一方には詩人たちの新しい表現形式への要求があった。そこで意識化されていくのが音韻の問題であり、「歌う詩から考える詩へ」という方向性を導いた戦後詩の第一世代である「荒地」への裏返しとして「考える詩から歌う詩へ」という流れが模索された。ただし、最終的にNHKのラジオ番組の終焉によって詩劇は各誌の話題に上らなくなっていく。それは、戦後におけるマスコミの拡大を目の当たりにして、詩がメディアと安易に結びつこうとした結果ともいえる。そのことを各誌の作品や論調の横断によって確認した。

(4) 新人の育成。上記(1)で記したように、「詩学」は「詩学研究会」を組織し、多くの新人を排出したが、「ユリイカ」「現代詩」ともに新人賞を設け、若手の登場に一役買った。なかでも1959年の「ユリイカ」新人賞の間宮舜二郎、「現代詩」新人賞の藤森安和は、当時の詩の世界に多くの話題を提供するとともに、総合週刊誌や新聞などでも紹介され、詩に関心を持たない人々へ現代詩のいまを知らせるという役割を担った。しかし、間宮、藤森とともに今日ではほとんど忘れられた存在になっている。そのことは、ニュースや話題を世間に提供するものそれらは常に一過性のものとして扱われ、次々と消費させていくマスコミのあり方を示している。また、そのことは同時に、将来有望な新人が登場したものの神風のような出現に喜ぶばかりで十分に育成できなかった詩の世界の問題をも浮かび上がらせていることを、本研究は明らかにした。

(5) 発行部数の問題。各誌はいずれも発行部数が少なく、売り上げが伸びないことに悩んでいた。その経済事情が、上記(3)で示したような詩以外のジャンルとの結びつきや、(2)でみたような詩に直接的に関わりのない特集や話題を提供することにつながっている。特に1960年に池田内閣が所得増計画を策定すると、物価が高騰し、印刷代や製本代も値上がりして各誌の台所事情はさらに苦しくなった。そのことが詩雑誌のあり方に多分に関係していることを、本研究で示した。

(6) 鮎川信夫の存在感。戦後詩の第一世代に属する鮎川信夫は上記(1)(4)に示した新人の育成や、「現代詩」の編集母体である現代詩の会における活動などで、存在の大きさを示した。鮎川が「死の灰」論争や上記(2)の「文学者の戦争責任」論争などでも集団と個に対するぶれない論調を示していることはつとに知られるとおりだが、「詩学」や「現代詩」における新人育成においても、後続世代の作品の個性、伸ばすべき心棒にあたると思われるところを的確に捉えて称揚する姿勢が強く示されており、これまで注目されることの少なかった鮎川の一側面を本研究は明らかにした。

(7) 上記以外に、1955年あたりから戦後詩そのものが相対化され、歴史的に捉え直す動きが出てきたこと、寺山修司のジャンルの垣根を越えた活躍なども本研究から浮かび上がってきた。また、調査・検討の過程で1959年に創刊され、現在も継続刊行されている「現代詩手帖」および思潮社のその後の躍進について検証する必要があるという課題が浮かび上がってきた。本研究との接続を意識しながら、さらに研究を深めていきたい。

## 5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計6件（うち査読付論文 2件/うち国際共著 0件/うちオープンアクセス 4件）

1. 著者名 加藤邦彦	4. 巻 29
2. 論文標題 新日本文学会から現代詩の会へ 「現代詩」・一九五八年	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 京都語文	6. 最初と最後の頁 133-150
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -
1. 著者名 宮崎真素美	4. 巻 13
2. 論文標題 紀元二六〇〇年の反照 内閉と崩壊、そして虚無	5. 発行年 2022年
3. 雑誌名 愛知県立大学日本文化学部論集	6. 最初と最後の頁 191-207
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -
1. 著者名 宮崎真素美	4. 巻 70
2. 論文標題 詩誌『詩学』の世界（2） 戦後10年からの展開	5. 発行年 2022年
3. 雑誌名 愛知県立大学説林	6. 最初と最後の頁 39-55
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -
1. 著者名 加藤邦彦	4. 巻 22
2. 論文標題 1960年前後の詩壇ジャーナリズムの展開と藤森安和 詩誌『現代詩』を中心に	5. 発行年 2022年
3. 雑誌名 Intelligence	6. 最初と最後の頁 160-171
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 宮崎真素美	4. 巻 7
2. 論文標題 詩誌『詩学』の世界 はじまりの10年	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 愛知県立大学文字文化財研究所紀要	6. 最初と最後の頁 3-18
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている (また、その予定である)	国際共著 -

1. 著者名 加藤邦彦	4. 巻 25
2. 論文標題 中原中也は押韻定型詩を書いたか 飯島耕一による評価をめぐって	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 中原中也研究	6. 最初と最後の頁 60-74
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

〔学会発表〕 計13件 (うち招待講演 0件 / うち国際学会 0件)

1. 発表者名 加藤邦彦
2. 発表標題 一九六〇年前後の詩壇ジャーナリズムの展開と藤森安和 詩誌「現代詩」を中心に
3. 学会等名 20世紀メディア研究所 第146回研究会
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 疋田雅昭
2. 発表標題 戦後詩の多様性と排他性 第一期『ユリイカ』を視座として
3. 学会等名 戦後詩雑誌研究会 第3回
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 加藤邦彦
2. 発表標題 「現代詩」の上昇と下降 一九六〇年～六二年を中心に
3. 学会等名 戦後詩雑誌研究会 第3回
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 宮崎真素美
2. 発表標題 展開する『詩学』2
3. 学会等名 戦後詩雑誌研究会 第3回
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 加藤邦彦
2. 発表標題 「現代詩」の終焉 一九六三年・一九六四年の動向を中心に
3. 学会等名 戦後詩雑誌研究会 第4回
4. 発表年 2022年

1. 発表者名 疋田雅昭
2. 発表標題 戦後詩の多様性と排他性 その2 『ユリイカ』の「詩劇」から考える
3. 学会等名 戦後詩雑誌研究会 第4回
4. 発表年 2022年

1. 発表者名 宮崎真素美
2. 発表標題 「詩劇」を考える
3. 学会等名 戦後詩雑誌研究会 第4回
4. 発表年 2022年

1. 発表者名 宮崎真素美
2. 発表標題 展開する『詩学』
3. 学会等名 戦後詩雑誌研究会 第2回
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 加藤邦彦
2. 発表標題 新日本文学会から現代詩の会へ 1958年前後の「現代詩」
3. 学会等名 戦後詩雑誌研究会 第2回
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 疋田雅昭
2. 発表標題 詩のアイデンティティをめぐって ジャンル越境をアダプテーションとして考え直してみる試み
3. 学会等名 戦後詩雑誌研究会 第2回
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 宮崎真素美
2. 発表標題 はじまりの『詩学』
3. 学会等名 戦後詩雑誌研究会 第1回
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 加藤邦彦
2. 発表標題 新日本文学会と「現代詩」 「現代詩」研究の今後のために
3. 学会等名 戦後詩雑誌研究会 第1回
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 疋田雅昭
2. 発表標題 戦後詩の多様性と排他性 第一期『ユリイカ』を視座として
3. 学会等名 戦後詩雑誌研究会 第1回
4. 発表年 2019年

〔図書〕 計1件

1. 著者名 澤正宏・加藤邦彦・田口麻奈・鳥羽耕史	4. 発行年 2020年
2. 出版社 三人社	5. 総ページ数 308
3. 書名 現代詩 復刻版 別冊（解題・総目次・執筆者索引）	

〔産業財産権〕

〔その他〕



6. 研究組織

	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
研究分担者	宮崎 真素美  (Miyazaki Masumi)  (50249281)	愛知県立大学・日本文化学部・教授    (23901)	
研究分担者	疋田 雅昭  (Hikita Masaaki)  (70469477)	東京学芸大学・教育学部・准教授    (12604)	

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計0件

8. 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関